

参加者の拡大を目指す体操フェスティバルの方策の提案 - “する・見る・支える” の立場からの調査より -

相原 奨之

体育学専攻

指導教員 本谷 聡 長谷川 聖修

Proposal of measures of gymnastics festival aiming to expand participants - From a survey from the standpoint of "doing · watching · supporting" - Masayuki AIHARA

In this research, we aimed to consider concrete measures to promote the expansion of participants to the Tsukuba gymnastics festival which is a local sport event. Therefore, we conducted questionnaire survey on participation situation, motivation for participation and evaluation to gymnastics festival for participants from standpoint of "doing · watching · supporting".

Survey respondent were 36% actors (110 people / 301 people), 36% (14 people / 38 people) executive committee members, and 26 viewers. As a result, regarding the degree of satisfaction, the percentage of respondents who answered "very good" or "good" in the actor, the viewers and the executive committee was 50% or more, indicating a high level of satisfaction including no answer. Also, regarding the exchange program, 44% of the viewers did not participate. From these, it is considered as one of the measures to insert programs incorporating elements of entertainment and to provide the content of exchange programs that can be easily joined on the spot without having to move from bleachers seats.

However, in implementing remedial measures, since considerable burden is imposed on the executive committee, we consider that it is important to plan and manage the entire event while considering the burden of the executive committee which is the "supportive" position.

【序論】

2017年3月に文部科学省が策定した第2期スポーツ基本計画によると、スポーツには、競技としてルールに則り、他者と競い合い自らの限界に挑戦するものと、健康維持や仲間との交流など多様な目的で行うものとがあると述べている。また、そのスポーツへの関わり方や価値については、スポーツを「する」・「見る」・「支える」の3つの観点から説明し、スポーツを「する」だけでなく、「見る」や「支える」ことも含めて検討することにより、スポーツ参画人口を拡大させることを狙いとしている。

近年、スポーツ参画拡大に向けた取り組みやその効果に関わる研究は、様々なスポーツイベントにおいて行われている(湊、2012・佐野、2008)。そのスポーツイベントのひとつとして、体操

(Gymnastics for All) 領域では、「体操フェスティバル」が全国各地で頻繁に実施されている。しかし、図1のように、その体操フェスティバルにおいては、様々な問題が挙げられており、荒木(1989)や古川(2001)によれば、全国規模の体操フェスティバルでは、参加チーム同士の交流の希薄化が報告されている。一方、地方規模の体操フェスティバルにおける問題では、新たな参加チームが少なかったことなどが報告されている。

全国規模	<ul style="list-style-type: none"> ～日本体操における諸問題～ (荒木、1989)(古川、2001) ・全体の演技発表時間の長時間化からくる参加チーム同士の交流希薄化 ・参加チーム増加による各グループの演技時間制限 ・演技者と観客の一体感の希薄化 ・ほとんどの観客は、自分や知り合いのグループの発表が終わるとして帰ってしまう。また、大会終了近くになると会場はガラガラになる
地方規模	<ul style="list-style-type: none"> ・参加団体の新規開拓「第9回とくしま体操祭」 (一般体操通信、2014) ・さらなる参加団体・参加者数の増加「2016体操フェスティバルinほっかいどう」 (一般体操通信、2016) ・新たな出演団体の獲得「第3回沖縄県体操祭」 (一般体操通信、2016) ・男子の参加が増えるような工夫「第25回栃木県体操フェスティバル」 (一般体操通信、2017) ・音響関連経費による運営費圧迫「第12回みやざき体操祭」 (一般体操通信、2017) ・各年齢層や特にダンス系の各スポーツ団体に参加へ呼びかけ参加者が気軽に参加できる環境を整備「第26回栃木県体操フェスティバル」 (荒木、2014) ・プログラムの間延び、音響トラブル、運営者内の情報共有の不備「つくば体操フェスティバル」 (実行委員会報告書、2016)

図1 体操フェスティバルの諸問題

【研究目的】

本研究では、地方規模のスポーツイベントであるつくば体操フェスティバルの「する」・「見る」・「支える」の立場の参加者を対象とし、参加状況や参加動機並びに、体操フェスティバルへの評価に関する質問紙調査を実施することによって、つくば体操フェスティバルへの参加者の拡大を促すための具体的な方策について検討することを目的とした。

尚、本研究では、つくば体操フェスティバルにおける参加者を①演技を「する」人＝演技者、②演技を「見る」人＝観覧者、③「支える」人＝実行委員、の3つに分類し、定義した。

【研究方法】

1. 調査対象者

つくば体操フェスティバルの演技者：301名、

実行委員：38名の計339名、来場した観覧者

2. 調査の実施方法

質問紙によるアンケート調査を実施した。

3. 調査内容について

演技者・観覧者・実行委員の3者で異なる質問紙を作成し、調査項目については3者で同一項目と特有項目を設定し、調査を行った(図2)。

演技者	(ア) 基本情報 (イ) きっかけ (ウ) 参加動機 (エ) 体操フェスティバルの評価 (オ) その他	(ア) 年齢、性別、参加区分、体操フェスティバルの参加回数 (イ) つくば体操フェスティバルを知ったきっかけ9項目 (ウ) 参加動機14項目参加した後の評価12項目 (エ) 総合的な満足度、チーム数、演技発表時間、施設面について5段階評価。交流プログラムについては、参加の有無、興味度について5段階評価。参加した理由と参加しなかった理由について自由記述。全体のプログラムの感想、施設面の評価の理由について自由記述。 (オ) イベントに関する意見や要望等について、自由記述
観覧者	演技者アンケートと同じ	(ウ) 参加動機13項目参加した後の評価13項目 (ア) (イ) (エ) (オ) は演技者アンケートと同じ
実行委員会	(ア) 基本情報 (エ) 体操フェスティバルの評価 (オ) その他 (カ) イベント当日までの準備について (キ) イベント当日の運営について (ク) 今後のつくば体操フェスティバルについて	(エ) 総合的な満足度について5段階評価。フェスティバル全体のプログラムについて自由記述 (カ) イベント当日までの運営の大きさ、満足度についてそれぞれ5段階評価。改善点については自由記述。 (キ) イベント当日の運営の大きさ、満足度についてそれぞれ5段階評価。改善点については自由記述。 (ク) 参加者を増やすための考え、魅力的なイベントにするための考えについて
	(ア) (オ) は演技者アンケートと同じ	

図2 調査内容について

【結果及び考察】

1. 回答した調査対象者

回答した調査対象者は、演技者36% <110名(男性35%・女性65%)>、実行委員36% <14名(男性50%・女性50%)>、観覧者26名 <男性35%・女性65%>であった。

2. 参加したきっかけ

つくば体操フェスティバルを知ったきっかけで最も多かった回答は、「出演者」で、演技者39%、観覧者63%、次に「指導者」で、演技者36%、観覧者15%であった。反対に、低かった回答は、「ポスター」が演技者2%、観覧者0%、「チラシ」が演技者1%、観覧者4%、「SNS(Facebook、Twitter)」が演技者0%、観覧者0%、「ホームページ」が演技者0%、観覧者0%、であった。つまり、指導者や出演者(=演技者)といったきっかけを通しての参加が多いことが示された。その一方で、ポスターやチラシ、ホームページについては、効果を発揮しておらず、活用方法において何らかの問題があることが推察された(図3)。

高千穂(2009)は、ホームページやインターネットなどIT活用が行われたことがイベントの成功要因と述べている。このことからホームページやポスター、チラシの活用に加え、SNS(facebook、twitter)などの多様な広報媒体を活用し、情報発信をすることで、より多くの人に周知でき、参加者拡大につながる可能性があるかと推察された。

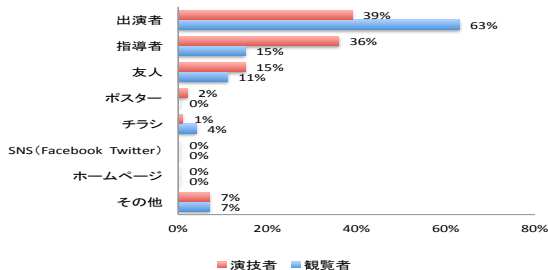


図3 演技者と観覧者におけるつくば体操フェスティバルを知ったきっかけ

3. 参加動機

演技者の参加動機の上位3項目は「音楽が好きだから」が63%、「体操について学ぶため」が58%、「友人に誘われたため」が58%であった(図4)。

また、観覧者の参加動機の上位3項目は、「体操に興味があったから」が63%、「運動の楽しみを広げるため」が60%、「音楽が好きだから」が57%であった(図5)。

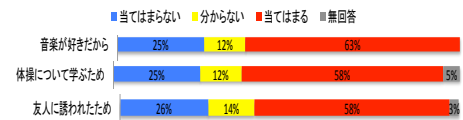


図4 演技者の参加動機上位3項目

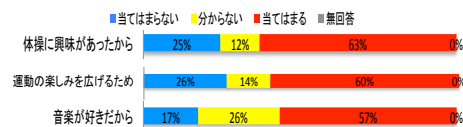


図5 観覧者の参加動機上位3項目

4. 演技者・観覧者・実行委員による全体評価

(1) 参加回数別による総合的な満足度

つくば体操フェスティバルの全体評価については、「とても良かった」・「良かった」と回答した割合が、演技者と観覧者と実行委員の3者すべてにおいて、全体の50%以上を占めた(無回答; 演技者28%、観覧者24%、実行委員0%)。また、体操フェスティバルの参加回数別における全体評価の結果に大きな差はなく、実行委員による否定的評価は認められなかった(図6)。

具体的な内容に関する自由記述においては、「バランス良くプログラムが構成されていてとてもいい」「非常に見応えがあり、レベルも高い(エンターテインメント性)。より多くの人に参加してもらおう工夫があれば、もっと有名になってもおかしくないと感じました」「幼い子からお年寄りまで幅広く良かった」などであった。

このため、参加者の満足度をさらに高めるためには、タレントや技術レベルの高いパフォーマーに演技を依頼し、観覧者を楽しませるような演出をすることによって、エンターテインメントの要素を盛り込んだプログラムを取り入れることなど見応えのあるイベントの内容を企画していくことも今後の改善策のひとつと考えられた。

次に、イベントへの参加回数別における満足度について、江藤(2010)によれば、イベントの参加回数が初めての参加者と複数回数の参加者では満足する要因が異なることが報告されている。つまり、今回の結果において、参加回数別に見ても同様に高い満足を得ていたものの、参加回数別の異なる要因に対応した多彩なプログラムを企画し実施していくことが、参加回数の異なる参加者のより高い満足につながる可能性があると考えられた。

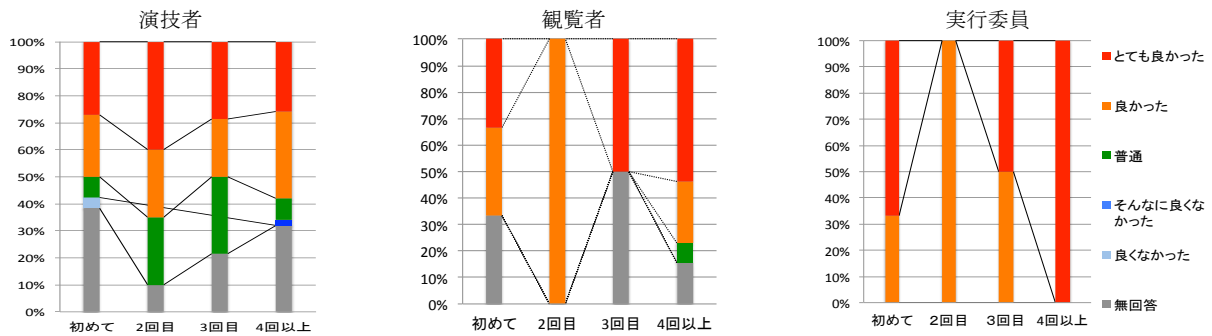


図6 異なる立場における参加回数別の総合的な満足度

5. 演技者と観覧者によるつくば体操フェスティバルの評価

(1) つくば体操フェスティバルの興味度

つくば体操フェスティバルの興味度について、「とても楽しかった」が演技者35%、観覧者27%で、「楽しかった」が演技者26%、観覧者23%であった(図7)。この要因については、「たくさんのプログラムがあって、楽しかった」「様々な演技で、見る事も演技も楽しめた。体操が多様化しているなどと思った」との自由記述から、プログラムの豊富さや演技の種類、多様性が興味度を高める要因となっていることが推察された。

一方、演技者と観覧者の興味度を比べると、観覧者の方が低かった。これについては、古川(2001)が報告している、演技者と観客(=観覧者)の一体感の希薄さなどからくる低い興味度といった体操フェスティバルの諸問題のひとつと同様の傾向と考えられることから、観覧者を飽きさせないといった観客の立場にたった配慮の重要性が確認できた。

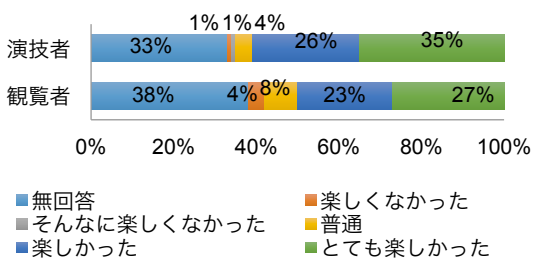


図7 つくば体操フェスティバルの興味度

(2) チーム数と演技発表時間と施設面について

チーム数について、「丁度良い」と回答した人は、演技者が55%で観覧者が67%であった(図8)。

次に演技発表時間については、「丁度良い」と回答した人は、演技者が63%で観覧者が69%であった(図9)。ここから、演技発表時間とチーム数について、ともに適切であったことが考えられた。しかし、自由記述においては、「もう少しゆったりとした時間が欲しい」「各演技は短い気がしたが、オープニング前のはじめのプログラムが長い気がした」という記述があったことから、イベント全体の規模を予め設定した上で、演技発表時

間とチーム数について検討することが重要であると考えられた。施設面については、「とても良かった」と回答した割合は演技者16%、観覧者50%で、「良かった」と回答した割合は演技者31%、観覧者31%であった(図10)。これについては、「広くきれい」「演技してる人と見学してる人の距離感から身近で親近感があり、迫力もあり良かった」などの自由記述から、演技発表フロアの広さ、観覧席からの見やすさといったことが心地よく感じる要因となっていることが推察された。

一方で、「そんなに良くなかった」と回答が、演技者において2%見られた。これについては、「演技の練習場所がなかったから」「少し寒かった」などの自由記述から、練習場所や室温が要因となっていたことが推察された。つまり、演技の練習場所を確保することや快適な演技発表するための環境を整えることが重要と考えられた。

以上より、施設面についても同様に、演技者と観覧者の立場と意見を踏まえて、今後検討していくことが重要であると考えられた。

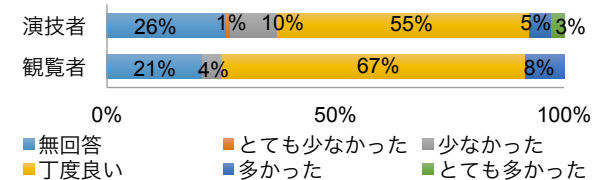


図8 チーム数についての評価

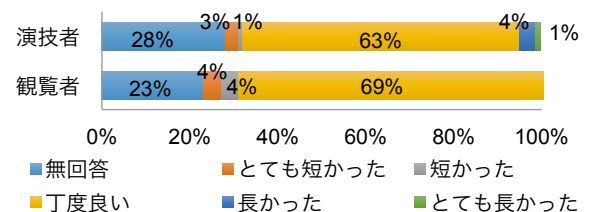


図9 演技発表時間についての評価

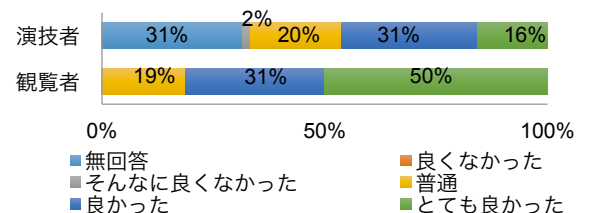


図10 施設面についての評価

(3) 交流プログラムの参加の有無と興味度

交流プログラムの参加の有無については、「参加した」と回答した割合は、演技者 59%、観覧者 28%であった。その一方で、観覧者の 44%が参加していなかったことが認められた(図 11)。興味度については、「楽しかった」「とても楽しかった」の回答が演技者と観覧者ともに 5 割以上であった(無回答;演技者 33%、観覧者 38%)。

参加した理由については、「身体を動かしたいから。楽しいから」「大勢の人と一緒に動かしたかったから」「みんなで動くことが楽しそうで魅力を感じた為」などの記述が見られた(図 12)。逆に参加しなかった理由として、「子どもがいたから」「子供 2 人を連れて参加は難しい」といった記述があったことから、参加が出来ない状況にあったことが推察された。

そのため、現在実施しているフロアに一同に集まり動くような形態の交流プログラムから、観客席から移動しなくてもその場で気軽に参加できるような形態に変えて企画していくことが改善策のひとつとして考えられた。

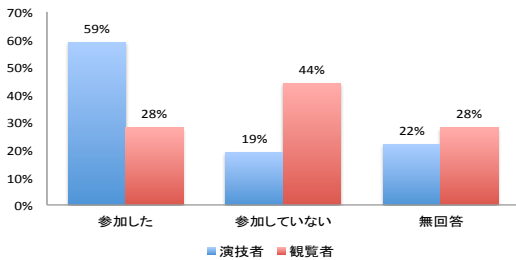


図 11 交流プログラムへの参加の有無

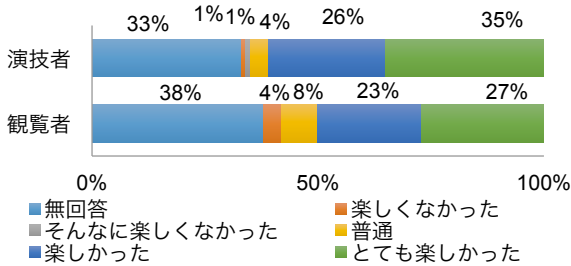


図 12 交流プログラムへの興味度

6. 実行委員による評価

(1) イベント当日までの準備と当日における運営の大変さと満足度について

実行委員の当日までの準備と当日における運営の大変さと満足度について、図 13、図 14 から、概ね満足して参加していた一方で、準備と運営について、大変であったことが示された。

江頭 (2010) は、イベントの参加者を増加させるためには、イベントのメニューを多彩にすることが重要であると述べている。しかし、その一方で、運営者への大きな負担があることを報告している。そのため「支える」立場である実行委員の負担を考慮しながら、イベント全体を企画し運営することや運営に関わる仕事を適切に分担する

こと、事前に打ち合わせの機会を増やすことをして、実行委員同士の連携をスムーズにとることが出来るようにするなどの改善策が重要であると考えられた。

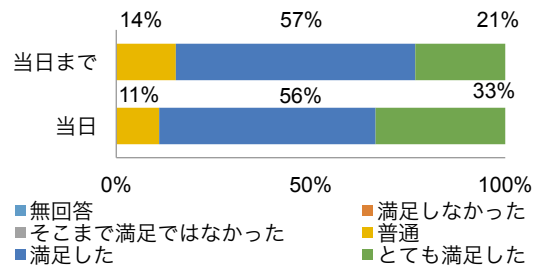


図 13 実行委員における当日までの準備と当日の運営に対する大変さ

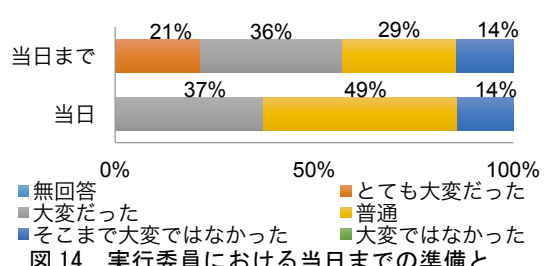


図 14 実行委員における当日までの準備と当日の運営に対する大変さ

【結論】

以上より、本研究の調査対象であったつくば体操フェスティバルについては、演技者・観覧者・実行委員より、主な調査内容において概ね肯定的な評価が得られた。また、得られた結果を検討し、参加者拡大のための具体的な方策については、図 15 のようにまとめられた。

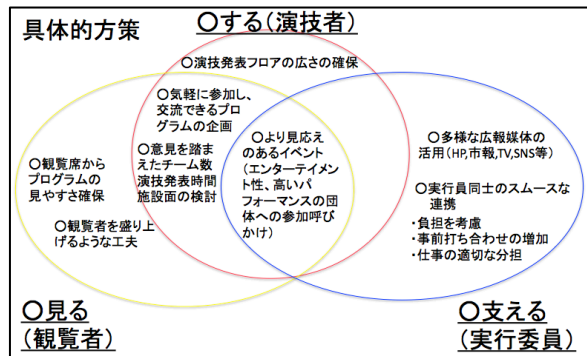


図 15 具体的方策のまとめ

このように、演技者・観覧者・実行委員といった異なる 3 つの立場からいくつかの観点において異なる特有の問題が確認された。

従って、今後、つくば体操フェスティバルへの参加者拡大を促すためには、示した具体的な方策を含めて、それらの問題に対応した改善策を検討して、企画したり実施したりすることが重要であると考えられた。